

パゴタ詣りに憩う人々

桐生 稔

ミャンマーは停滞と束縛をもたらした「ビルマ式社会主義」体制が一九八八年の民主化騒動によって崩壊して、いま軍政下にあるものの市場経済への移行が進展して、人々の生活体系が徐々に変容しはじめている。永い間この国の人々は遊びやレジャーに親しむ余裕も自由もなかった。しかし、この数年、鎖国や統制政策が撤廃されたことにより、人々の生活上の束縛がずいぶん緩和された。娯楽の形も当然変化しつつある。ただ、政治的にも経済的にも過渡期であるこの国の人々が、ほんとうに娯楽を享受できるのは、もう少し時間がかかりそうである。

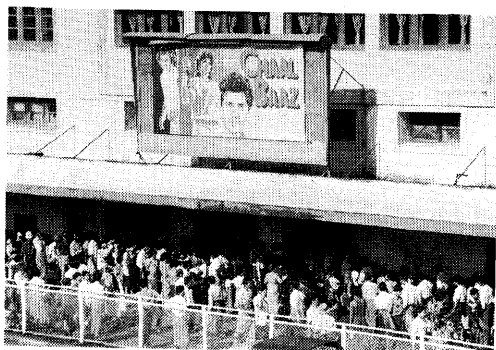
祭とパゴタ詣

りが一番人気

週末の人々の過ごし方で、最もポピュラーなのは、家族でパゴタにお詣りすることである。どんな辺鄙で小さな村でもパゴタだけは必ずある。首都ヤンゴンのシェウエーダゴン・パゴタは、こうした参詣者たちで、特に週末は大

いに賑わう。子連れの家族は、手作りの弁当、お菓子を持って、ピクニックといったところ。若者たちはグループを作って、男女の交際の場として使い、老夫婦は日がな一日瞑想に耽る。パゴタでは土足が厳禁される神聖なところ、誰からもディスプレイされずに静かな休日過ごし、仏への功德も積むことができる。小乗仏教徒にとつて、信心と娯楽の一石二鳥となる。このパゴタ詣りと旅行を組み合わせての巡礼も盛んで、聖地巡りのコースは無数にある。「ビルマ式社会主義」の時代には、たとえ巡礼といつても届出制となつていたため、遠隔地に行くことが難しかった。現在では、その必要もなく、また民間旅行業の開設も許されて、全国巡礼の旅は大変な人気となっている。聖地巡礼では、パゴタの周りに宿坊があつて、自炊すれば費用がかからず、何日でも逗留できる。人気の高い巡礼地は、マンダレーなどとともに、ポパ山のタウン・カラット、カレン州のチャイテイヨー、仏足石のあるミインブーなど山間僻地にも多い。

農村では、この他に数々の祭が住民の娯楽となっている。ミャンマー固有のナット信仰（三七の英雄神への信仰）に基づく祭は、特に上ビルマを中心に各地で年中行事として行われ、祭には近郷近在の人々が集まり、出店や芝居小屋などで賑わう。マンダレーの北郊三〇キロメートルにあるトンビヨン村では、毎年八月に当地で祀られているパガン朝の英雄シュウエピンジー、シュウエピンゲーの兄弟神の神体を年一回イラワジ河で清める祭がある。



行列をつくるヤンゴンの映画館

この祭は全国で最大規模のもので、毎年数十万人の人出で賑わう。かつては、徒歩や牛車で祭り見物に来たものだが、近年では車での参詣が多くなり、当日は日本の盆・暮れも顔負けするほどの混雑である。こうした大きな祭だけでなく、村々で行われる仏教の通過儀礼や家の新築、結婚式などが、人々にとって、このうえない娯楽となっている。

行列つくる映画館

一般大衆にとって映画も人気の高い娯楽である。しかし、近年テレビ放送の充実化とビデオの普及によって、映画人気にかげりが見えはじめた。それでも、評判の高い映画には連日行列ができる。

この国の映画産業は、一連の国有化政策に基づいて一九六四年に国有化され、九〇年まで映画製作および全映画館は国营企業として存在した。軍政下のプライバタイゼーションで、映画産業も民営化が行われ、民間映画製作も許可されるようになった。しかし、外貨不足でフィルムや機材の輸入に

限りがあつて、製作本数は年々減少している。六〇年代には年間一二〇本程度の製作であつたが、現在では三〇本と往時の四分の一、また輸入映画も年間一五本ほどに減つている。常設映画館は全国で一六八館、このうち三九館がヤンゴン市内にある。このほか、祭などで野外での映画上映も各地で行われるが、電気のない村ではディーゼル発電機の音がやかましく、またスクリーンが風に揺れたりして、せっかくのラブシーンも台無しになることもしばしばである。映画館の入場料は座席によつて五〜二五チャット（一チャットは公定で約一七円）で、他の物価に比べても安くはない。評判の高い映画には、必ず闇値チケットが出回り、三〜四倍にはね上がることもある。

国産映画では、これまでほとんどの映画がラブストーリーで、ハッピーエンドとなる。延々三時間の大作もあるが、会話ばかりで動きが少ないために退屈する映画が多かつた。しかし近年は、アクションものやシリアスドラマも作られており、世相を反映したものもある。

最近ヒットした映画では、“*Myitho yi Maya*”（疑瞞の流れ）がロングランを続け、主役の女優（*Moe Moe Myint Aung*）は一躍人気ナンバーワンになつたという。映画俳優はこの国でも同じで、収入も多く庶民の垂涎の的である。主演級の俳優は映画一本につき一五〜二〇万チャットの出演料というから、大臣の年収の二〜三倍になる。最近では小規模の民間映画製作会社も設立され、白黒映画に限つて製作が許可され、私設映画館で上映されている。民間映画のなか

には、反軍政・民主化運動をテーマにしたものもあるといわれているが、公表されていない。外国映画では、やはりハリウッドのアクションものに人気が集まり、日本映画では「ゴルゴ13」、「座頭市シリーズ」がヒットしたが、日本の女優ではいまでも山口百恵の人気が高い。映画館では、かつて日本でもあったように観客は涙、拍手、悲鳴で応え、ストーリーに溶け込むことが多い。かつて上映された日本映画「真珠湾攻撃」では、日本軍の攻撃に観客は手を打って歓声をあげていた。この国が、永い間英国の植民地下にあつて、日本軍のミャンマー進攻が独立の引き金になったという歴史が、人々の日本軍への共感を呼んだということだろう。

映画が終わるとスクリーンに国旗が映し出され、国歌が斉唱されるが、かつては僧侶を除いて（ヒトではないから必要ない）ほとんどの人が起立して斉唱したものが、最近では無視して退出する人のほうが多くなった。軍政に対する暗黙の抵抗なのかもしれない。

人気上昇の

テレビとビデオ

テレビが放映され始めたのは一九八〇年のことで、いまでも国営の一局だけである。しかし、普及台数は急増して、九三年現在、全国で推計一三万台に達している。テレビ台数が急増した理由は、市場経済移行による民間の受像機輸入が簡単になったこともあるが、テレビ番組の充実も引き金になった。かつては無味乾燥なニュースと伝統音楽がほとんどだった国営放送は、ずいぶん工夫されて、流行歌や独自製作の連続ドラマもある。最も楽しいのはCFで、情報の少ないこの国の人々にとって重

要な経済情報源として人気がある。ただ、放送開始直後に流される軍歌（原曲はほとんど日本の軍歌）はいただけでないし、軍政下にあることを改めて思い知らされる。高所得者は特約によって二十四時間放送されるアジア版BBCも見ることができし、またビデオデッキの普及も進んでいる。ヤンゴンでは、ビデオ・レンタル店もオープンして、若者たちの間で人気がある。ビデオは、やはり海外版の映画が多く、またかなり新しい映画ビデオも出回っていることから、常設映画館に足を運ぶ人数も減りはじめていることがうなずける。

しかし、テレビはまだ貴重品、かつて日本でもそうであったように、布製のカバーをかぶせたり木製の扉付き箱に仕舞われていることが多い。農村では放映時間に合わせて、テレビのある家に近所の人々が集まり、大勢で観賞している。

近代化と伝統文化

軍政下のミャンマーでは、先進国からのODAが停止され、また海外からの投資も本格化していない。このため、経済はたしかに民間部門が徐々に活性化しているとはいえ、基本的には停滞を続けている。ASEAN諸国のように急激な都市化や生活形態の近代化はまだ現れてはいない。このため、都市部では、バーやキャバレーなどのナイト・スポットはほとんどない。人々の生活は、まだきちんと伝統的な習慣や作法が守られている。伝統衣（ロンジー）を着て、小乗仏教を信仰し、飲酒を慎む人々の生活にとつて、夜の歓楽街はまだ不似合いだし、不必要なのである。ただ、今後国際化が進行し、経済

発展とともにこうした歓楽街が出現するのは、ミャンマー人が好むと好まざるとにかかわらず不可避なことである。

すでに、中国人の往来が増加し、華僑の多い第二の都市マンダレーでは、各所にカラオケ・バーが開業して盛況を呈している。ヤンゴンにも、いずれはバンコクやマニラのような歓楽街が出現するだろう。ネーウィン時代には、こうした伝統文化と相容れない風俗産業は法的に規制されていた。しかし、経済発展や近代化にともない、風俗産業の進出が不可避であるなら、これを規制してはならないだろう。人々の社会的自由を保証することが、経済発展の基本的条件だからである。

心配なのは、美しく良き伝統が破壊されたり変形することである。ミャンマーでは、特に若者たちの間では、「民主化とはすべての旧弊を破壊することだ」との理解が広まっている。それほどまでにネーウィン独裁体制下での非民主的社會への怨念は強いものがある。しかしそのことが伝統文化を破壊し、西欧流の近代化が民主化とイコールに解釈されることは危険である。自由と基本的人権の保証と伝統的文化の維持は共存しなければならぬ。その意味でも、この国の娯楽の変化が、伝統的生活を損なうことにならないことを祈っている。